



巻頭対談

吉田松陰が獄中でつかんだ教育の極意

幕末の人間力を語る

作家・画家

よしだみどり VS 宇城憲治

武道家・UK実践塾代表

よしだみどり
東京生まれ。作家・画家。日本テレビの幼児教育番組「ロンパールーム」の司会を1969年から4年間担当した。著書に『知られざる「吉田松陰伝」』『宝島』のステイヴンソンがなぜ?』『祥伝社』、ステイヴンソンの生涯を描いた『物語る人』(毎日新聞社、平成12年度「日本文芸大賞」伝記・翻訳新人賞)受賞などがある。訳書『英和対訳』に、『金子みすゞ』心の詩集』(藤原書店)、『ひんの悪魔』(福音館書店)など。



「松陰に出会ったとたんに関が変わり、走り出す、その教育の根本は、共に学ぶという謙虚なあり方にあったのだと思います。」

よしだみどり

作家であり画家のよしだみどりさんは、イギリスの文豪ステイヴンソンが、吉田松陰について「生きる力を与えてくれた日本の英雄」として最初の伝記を書いたことに驚き感動し、その経緯を著書『知られざる「吉田松陰伝」』に著します。幼くして山鹿流兵学師範を継ぎ、心身両面において今では想像もつかぬ厳しい教育を受けた吉田松陰。この明治維新の原動力となった松陰や多くの志士たちを生んだ土壌はどこからくるのか。当時と今との人間力の違いとは。『気でよみがえる人間力』の著者でもある宇城憲治氏と、幕末に見る日本人のエネルギーについて、縦横に語っていただいた。

取材 2013年2月15日 東京都品川にて



うしろ けんじ

1949年宮崎県生まれ。エレクトロニクス分野の技術者、経営者として活躍する一方で武道修行による指導で、人々に潜在能力を気づかせる活動に専念。空手実践塾、宇城道塾、親子塾、高校野球塾、各企業・学校講演などで「気づく・気づかせる」指導を展開中。㈱UK実践塾代表取締役、心道流空手道範士八段、全剣連居合道教士七段、宇城塾絵本道場創心館館長

人間の統一体とか
調和という力は、
今の日本にとても必要なことだと思っ
ています。



生と死から生み出された剣術の本質は
「理」と「気」の一致にあり、
その本質こそが、調和力なんです。

幕末に活かされていた「守る力」

宇城 本日はお会いできることを大変楽しみにしております。よしださんのご著書『知られざる「吉田松陰伝」』には大変感銘を受けまして、いろいろなところで話をしているんです。昨今、元オリンピック選手の不祥事をはじめ、スポーツ界、学校教育現場における部活での体罰問題、いじめ、隠蔽など、課題が山積みしておりますが、よしださんのご著書にあるように、幕末に多くの人を感化させた吉田松陰のような生き方・志は、まさに今の日本再生のヒントになるのではないかと思います。

本日は吉田松陰の生き様と教育ということテーマにお話ができればと思っ
ています。

よしだ こちらこそ、どうぞよろしくお願
いいたします。『道』のスタッフは女性
だけなんです。心強いですね。これだ
け女子教育が発達して、時には男性より
もすぐれた方がいらつしゃるのに、今で
もまだ女性の活躍の場が少ないように感
じているからですが。ところで、吉田松
陰は婦女教育を最初に考えた人という説
があります。人材を産むのも最初に育て
るのも女性だからという理由からですが。

宇城 今あらためて考えるとそれは頷け
ることもあるように思います。という
のも現在主宰している塾での人間力の検
証から、たとえば、男性8名ががっちり

るのが統一体による調和力だからなん
ですね。さらにこの身体の調和力は、も
の考え方や考え方の根源ともなり、日常
の生き方もそうなっていく。すなわち人
間力です。それは今の競技勝敗一辺倒の
スポーツ的なあり方とは本質が違います。
それだけに、今のスポーツだけに特化し
た次元でよしとする世界にとどまらず、
もう一度、幕末の頃の武術に見る次元に
返ってみることで、多くのことが得られ
るのではないかと思っているんです。

武術というとすぐに右翼とか戦争に結
び付ける人がいますが、そういうことを
刷り込んだ教育こそが非常に間違ってい
て、むしろ今ある教育のあり方こそが、
日本文化を軽視し、心なしの人間を創り
出す要因にもなっているのではないかと
思います。

ゾウリンシが教える 生物の自然調和

よしだ 確かに。私もそう思います。そ
して、先生がご著書の『気でよみがえる
人間力』で「統一体」ということをおっ
しゃっています。組織もまさに統一
体でなければなりません。そのために
は、組織は上にいけばいくほど下になら
ないといけない。つまり上と下、縦と横
が分離してはいけない。先生のおっしゃ
る統一体という発想が、組織の活性化に
も必要だと思います。

昔はソニーの井深大さんや盛田昭夫さ
んとか、立派な経営者がいて、そういう

組んだスクラムを、①小学生、②中学生
の女子、③大人の男性のそれぞれに押し
倒してもらって検証で、誰が一番簡単にス
クラムを崩せるかと言うと、小学生なん
です。その次に女子中学生なんです。
大人の男性が押した時は崩れるどころか
ほとんど動かないんです。

この1月にも奈良の桜井高校の講習会
で同じような検証をやったのですが、約
1000名の受講者から驚きの歓声が上
がりました。そのくらい従来の常識から
すれば考えられないことなんです。と
ころがさらに強いのが実は赤ちゃんを抱
いたお母さんや妊婦さんなんです。それ
と2歳から5歳ぐらいまでの幼児なんで
す。そういう実践事実から考えると、
その力の出所は、生命を宿す力、あるい
は守る力として元々人間に備わっている
人間力と関係しているのではないと思
うんです。

だから今のスポーツなどで主流となっ
ている筋力的な部分体としての力ではな
く、生命を育む力や身を守る力として自
然に出る力なんだと思っ
た。ただ、この検証も気という方法を用いると実
は男性でも可能にすることができると
す。それは気によって生命体としての統
一体になるからで、吉田松陰や山岡鉄舟
など幕末に活躍した人たちも、そういう
力に気づいていたのではないと思いま
す。それは生と死を土台とした剣術の本
質が、「理」と「気」の一致にあると剣法
書や口伝などで明らかにされていること
からもわかります。まさにその根源にあ

人たちは上にいけばいくほど下でした。
盛田さんとはお会いしたことがありま
す。相手が社長であろうが若者であら
うが、同じように接しておられました。
上下一体の感覚を持っておられたから
でしょうね。理想のリーダーのイメージ
でした。

今、気になる「調和」という言葉ですが、
以前、私が私淑して数年間勉強させて
いただいた生物物理学の大沢文夫先生が
おっしゃっていた言葉ですが、「どう見ても
生物が大事にしているのは調和だ」と。
大沢先生は、夏目漱石の『我輩は猫で
ある』に出てくる寒月君のモデルもある
物理学者・寺田寅彦の孫弟子で、バイオ
サイエンスを開拓した学者ですが、若い
研究者を育てることに尽力した研究者に
贈られるネイチャーメンター賞も受賞さ
れている方です。

これは私がだいぶ前に、大沢先生のお
話について書いたエッセイですが、教育
について考える上で、とても興味深いお
話なのでご紹介させていただきます。

「さて私は、最近、著名な生物物理学者
の大沢文夫氏のお話で、池などで肉眼で
見るのたいへんなゾウリンシの世界に
も落ちこぼれがいたことを知った。落ち
こぼれは、除いてもまた、落ちこぼれが
いないグループのなかから落ちこぼれは
出現し、除いても除いてもあらわれる必
要不可欠な存在だと言う。実験映画を見
せていただくと、25℃で培養したゾウリ
ムシは、25℃が快適。20℃から30℃の温

志をたて、

元時計職人／木彫「夢多工房」主宰

秋吉 忠

やり抜く

部品造りの日本一の職人になる！
なにがなんでも本物を作る！



お話を伺った五十鈴旅館の一角に設けられた展示室には、木彫りのりんご、かぼちゃ、キャベツ、小指ほどの鉋かんや包丁、見事に再現された古民家のミニチュアなど、秋吉さんの作品が溢れんばかりに飾られていた。見る人を圧倒する精巧な木彫細工の根底にあるものは、58年間の時計職人としての人生だった。自分で一旦決めたらやり遂げる——職人人生で培われた気概あふれるお話を伺った。

取材 2013年1月30日

福岡県糟屋郡五十鈴旅館にて



あきよし ただし
1937年（昭和12）生まれ。大分県中津市出身。昭和41年に12年間住み込みで修行しながら勤めた緒方時計店から独立し店を構える。同時に木彫の腕も磨き、様々な木彫細工を制作。なかでも古民家や実際に使える道具の精巧なミニチュアは見る人を圧倒している。現在は、木彫『夢多工房』主宰。

将来は自分で食べていく！

——木彫の作品を拝見させていただきましたが、一つひとつがものすごく精巧で素晴らしいですね。作品の根源にどんなエネルギーがあるのでしょうか。是非お伺いしたいと思いついて本日は伺わせていただきました。どうぞよろしくお願いたします。

お若い頃にご両親を亡くされて、ずいぶんご苦労されたとお伺いました。

私が中学1年の10月に父が亡くなり、その後は3年間、新聞配達をしたりしていました。そしてある時、学校からの帰り道に時計屋で職人さんがキズミ（拡大鏡）をかけて時計を修理している姿を見て、「俺は時計屋になろう」と決めました。そして私が育った大分県の中津のその時計屋で1年間働きました。でもそこにそのままいたのでは、将来したいことができないかもしれないぞと思って、東京や大阪など、都会へ出て行くことと思いついたんです。そして、人を頼って探したところ、博多の東中洲にある有名な緒方時計店を紹介してもらったという葉書をおる方からいただいたんです。それで、「じゃあ俺はそこに行こう」と決めました。

中学を卒業してすぐにお袋もなくしたので、その時はすでに一人になっていました。門司にいる私の姉が学校の先生をしていたのですが、高校だけは出ておくと「高校を出してやるから門司に來い」

師につくし自己を磨き人を育てる



武術で得た人間哲学

神道夢想流杖心会主宰 全剣連杖道範士八段

松井健二

戦中の疎開、戦後復興、そして高度経済成長を第一線の企業人として走り抜ける一方で、神道夢想流杖術に出会い、師につくす修行のなかでその感性を磨いてきた松井健二氏。その目には、今の日本人があまりに人間らしく生きていないと映る。

人への想い、見えないものを感じる力、自然への畏敬の念――。自らの師への想いを軸に、若者たちへのメッセージをいただいた。

取材 2013年2月4日 東京都豊島区にて

まついけんじ

昭和10年(1935)中国上海生まれ。明治大学文学部文学科卒業。川崎重工業(株)に26年間勤め定年退職。昭和30年に神道夢想流、清水隆次師範に入門。神道夢想流杖術及び併伝武術を学ぶ。昭和53年に清水師範他界後、福岡の藤市威師範に師事し、神道夢想流杖術免許皆伝。昭和55年に神道夢想流杖心会設立。以降空手、拳法、合気道の師範にも指導。神道夢想流杖心会主宰、日本古武道振興会会員、日本古武道協会会員、全日本剣道連盟杖道範士八段、東京都剣道連盟杖道部会長、杖心会ホームページ <http://www.joshinkai.com/>



人情、血の熱さというものが伝わらなくなっている。失敗のない人間は、ひよろつと育つて、何かあつたら倒れて終わりです。

3回やって直せなければ
二度とやってくれませんでした。
ですからこっちも必死でした。

杖道との出会い—— 清水隆次先生

——19歳の頃に古武道大会をご覧になつたのがきっかけで杖道を始められたそうですね。たくさんの先生方が演武をされたと思うのですが、そのなかで「清水先生に就きたい」と思われたのはなぜでしょうか。

説明のしようがないのですよ。「あ、この先生に就きたい」そう思っただけなんです。一目ぼれというのでしょうか(笑)。人柄なんです。

当時の道場では私がいちばん乱暴者でした。杖を使っているのに手が出る、足が出る、蹴飛ばすわ、ぶん投げるわね(笑)。しかしどんな乱暴しても先生はニコニコしていません。本来、清水先生はもっと厳しい稽古をしていたのですが、杖道の普及を計るようになり、当時はすでにそういう厳しい稽古をしなくなっていました。しかしご自身が若い頃していたことだから、私のやんちゃぶりということか、「武術の前に喧嘩だろう」というところを黙って見ていたところがあります。私は清水先生に怒られたことがないので

1回だけ、稽古中に杖をばつと飛ばされて拾いに行く時に、「敵に後ろを見せるな！」と怒鳴られたことがあるだけです。

道場に通い出した頃、私は「人はなぜ生きるか、死ぬか」というようなことを考えすぎてノイローゼぎみでした。そのことを清水先生はご存知でしたので、私をつかまえては、「松井さん、馬鹿になりなさい」と言ってくれました。「自分は棒ひとつでちゃんと食べてきたし、それだけのものをつくってきた。何をしたら生きていけるんですよ、だから馬鹿になりなさいよ」と。これは言われ続けましたね。私がいろいろ悩んだりすると、「苦しい時の神頼みと申すでしょう、神仏どつちでもいいから行っていらつしやい、それだけで楽になりますよ」とも言ってくれました。その言葉に私はどんなに救われたかわかりません。

なんとというか、そういうふうな気遣いをしてくださる師匠についていくのは、私にとって当然のことだったのです。

現代の人は、あの頃の教え方についてはいけないかもしれません。先生が「こうだ」と示されたことを、「はい」とやってみる。「違ふ」と言われる。3回やって直せなければ二度とやってくれませんで

す。
私が「乙藤先生、この技は考えれば考えるほどおかしいですよ」と言うと、乙藤先生も血の気の多い方ですから、「それならかかって来い！」と言って(笑)。やってみて「あつ」と気がつくことがあつて、私が「先生、納得いたしました」と言うと、「松井に許可をもらつたよ」と乙藤先生に皮肉を言われたものです。納得しただけで、先生に対して許可を与えるなんて気持ちはまったくなかったのですが(笑)。

すべてを師に合わせる

そうやって「甥」である私はことあるごとに乙藤先生にケンカを売りました。乙藤先生が福岡から出て来られた際は、「先生、お元気ですか」と聞くと「元気なわけがなかとよ」とおっしゃるので、よし、ケンカを売ってやろうと(笑)。「先生、こんなことしたら叩き斬られてしまいます、おかしくないですか?」「いや、そんなことはない」と、先生の背筋がだんだん伸びて元気になってくるのです。

だから乙藤先生がいらつしやる時は私はいつも「くそじじい！」と向かっていて、逆に先生の「この若造に負けてたまるか」という気を引っ張り出していたんです。

ですが、どういうわけか私は乙藤先生には気に入られていて、先生が福岡から東京の定宿としている緋武館道場にいらつしやると「松井はどうした!」と言わ

れる。館長の松村君から「先輩、先生が『松井はどうした』と言っていますよ」と電話がかかってくる。「はい!」と言って会いに行きました。もちろんもう家に帰れません(笑)。

「そろそろ終電で」なんて言えば「ほう、終電というものがあるか」と機嫌が悪い!だから「ここに居ります」と。「いつまで居るとか」「朝まで居ります」「それならよか」とね(笑)。

乙藤先生は決まって日本酒でした。日本酒の杯のやりとりをしなければ駄目だという主義なのです。

99歳まで酒を飲みつばなし、煙草を吸いつばなし、夜更かししつばなしの方で



乙藤市蔵(左)と清水隆次(右)

した。解説なんて一言もないです。「やってみせる」ものを「盗め」ということですね。ですからこっちも必死でした。

「必死にやった」と言っても、おそろくみなさんと違うと思います。私は清水先生の稽古を受ける時は「技術的にはかなわないのはわかっている。でも魂の当たり合いなら負けるものか!」と向かっていったのです。もちろん、それでも師には負けます。自分が進歩をすればするほど呼吸ができなくなる稽古の連続でした。現代人の人間の稀薄さは、この「魂を以て当たる」ということができなくなっていることに基因するのではないのでしょうか。

二人目の師 乙藤市蔵先生

——23年間就かれた清水先生が亡くなられた後、清水先生の弟子である乙藤市蔵先生に師事されるわけですね。

そうです。この清水先生との一切解説なしの稽古の見直し作業が、その後、乙藤先生に就くようになってから始まるのです。

しかし私は清水門下の立場が強くありましたので、3年間は喪に服し、すぐに乙藤先生に就くということはありませんでした。この3年間が私にとっては宝の期間でした。乙藤先生は清水先生の弟子ですから、当時の乙藤先生と私は、言わば叔父・甥の関係であり、何でも聞ける関係でした。昔は一度師弟関係となつたら質問などは決してできませんでした。師匠に質問するなどもつてのほかにいう時代だつたからです。師匠に質問をするだけではなく、例えば師匠に「このほうがいいと思います」なんてことを言ったら、「そうか。もうお前は来る必要はないよ」となつて破門です。そういう時代に先生に自由に質問できる期間があつたということは異例のことなので

棒杖術について

「棒」とは形状を表わし、「杖」とは用法をもととした表現で、本来は「棒術」「杖術」と分けるものではなく、昔は一般的に「棒杖」と言つた。流派や歴史により表現が違うだけで、その本質には変わりはない。

棒杖術には、刀や槍などを使うことを認められなかった農民のなかで発達した闘い方と、武士社会で発達した闘い方がある。武士の闘い方は、槍や薙刀の先を斬られてしまった時に、それを棒として使う闘い方であつた。

棒杖は最古の武器であるが、殺傷力は低い。そのため徳川時代になり世の中が平穏になると、捕り手(警察官)の捕り手技として位置づけられた。各藩に警察機構があつたため、それぞれが流派としての特性をもつて発達した。



夢想権之助神社にて 乙藤先生と